

## 人が通らない道

日本へ来て今年で42年になる。カトリック教会の宣教師修道会、神言会の会員なので、海外へ派遣されること自体は珍しくない。むしろ故郷を離れて生活し働くことは、入会の中から了解済みであった。しかし、グローバリゼーションが日常



南山大学学長 ミカエル・カルマノ 1

会話で通用するカタカナ語になる前の時代、私にとっ

て「普通」と思われる道は、アメリカの詩人ロバート・フロストの有名な詩のタイト

「The Road Not Taken」イメージに例えれば、私が選んだ道はフロストがいう「私道」ではなかったこと

## 出会った人と共に歩む道に

という、謎の多い国であっただけに、友人達の目にはかなりエキゾチックな選択に見えたに違いない。

ルである。深い森を通る道であったかもしれない。けれども、実際に辿ってみると、出会った時、自分が進まなかった道のことを指している。この

ミカエル・カルマノ ドイツの神学校を卒業後、1970年に来日し、74年南山大学神学科を卒業。その後、米国で教育学を学び、78年米国カトリック大学で教育学修士、83年シカゴ大学で教育学博士を取得。75年に司祭叙階。84年から南山大学で教鞭をとり、90年助教授、96年教授。08年学長に就任。ドイツ・ヘッセ州リンブルク出身。64歳。



シカゴ・ハートマラソンで(82年)



筆者近影

このコラムではしばしば「マイウェイ」について述べて行くが、それは、

いろいろな方と一緒に歩む道、our way together となったからである。そもそも、私達は自分の道を選んですぐに走り出すことができるわけではない。その前に先ずは歩くことを学ばないと行けない。いきなりフルマラソンを走ることが不可能であるし、格好良くゴールラインを踏むためには練習が必要である。日本へ来て、日本語を勉強し始めて痛感したことであるが、フルマラソンの完走は乳母車に乗せてもらい、四つんばいになって身近のところを探求することから始まるのである。